
この背中に、白い翼は無いとしても。 5 《第四章～どうか壊さないで、貴方の望む幸福を～》

煌はじめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この背中に、白い翼は無いとしても。 5 《第四章》どうか壊さないで、貴方の望む幸福を《》

【Nコード】

N5866Y

【作者名】

煌はじめ

【あらすじ】

『なんだよ、悪いのは風丸じゃんか！風丸なんかだいつきらいだ
！！』

数年前の幼

き日。円堂守は他愛のないことで親友だった彼と喧嘩をし、そんな言葉を投げつけた。当たり前前の幸せが当たり前前にあることを疑わなかった筈。次の日には当たり前前のように仲直りできる筈だったその小さな争いが、未来を狂わせるなどと誰が予想しただろうか。

明かされた過去の罪。魔女と交わってしまった愚かな契約と、愛する仲間の死。度重なる悲劇。皆を太陽のように導いてきた円堂の心はついに砕けてしまふ。その時彼を愛する者として、秋がとった行動は一つだった。

同じ時、愛媛でもまた運命が動く。エイリアの使途達に追い詰められ、満身創痍で逃げ続ける不動。彼の心の叫びを聴いた小鳥遊は、犠牲を覚悟で単身救出へと向かう。全ては愛する者と生きる為に。

円堂。秋。小鳥遊。そして反逆を決意するエイリアの子供達。止まない雨の中、それでも希望の歌は響くのか。

残酷で美しく脆い、後に

伝えられし『エイリア事変』。これはその、もう一つの物語。その第四章。

はじめに。

この作品は、イナズマイレブンの二次創作小説『この背中に、白い翼は無いとしても』第二章・どうか畏れないで、目の前に在る真実を』の続編になります。公式とは一切関係がありません。また、以下の点が含まれます。

イナズマイレブン二期（驚異の侵略者編）をベースにしたパラレル。

原作沿いと見せかけたサッカーバトルファンタジー。最終的には原作とまったく違った展開と結末が待っています。

闇墜ち要素、死ネタ要素強し。残酷な生体実験描写、暴力描写あり。また間接的に性的暴力や虐待を示唆する表現がある為、R15指定。

エイリア学園はマスターランク以外洗脳されている設定。

全てのキャラクターにおいて過去捏造だらけ。

塔子と鬼道が幼なじみ設定。この二人で恋愛描写あり（プラトニック）

他ウルビダ×ヒロトと小鳥遊×不動要素が若干あり。

鬼道やエイリアっ子をはじめとして、悲惨な目に遭うキャラが後を絶たず。

うみねこパロ要素あり。全ての悪事の黒幕として魔女が登場。

ディシディアファイナルファンタジー、キングダムハーツ、すばらしきこのせかい、からゲストキャラ出演。ただし上記キャラを知らずとも支障なし。

一応一般向けとして執筆しておりますが、一部女性向けに見える表

現があるかもしれない。

基本友情重視ですが、塔子×鬼道、ウルビダ×ヒロト、小鳥遊×不動以外にも公式の恋愛描写は若干あります。夏未 円堂 秋、リカ×一之瀬は強めかも。

また基本的にダーク。ものすごくダーク。

序章を読まれた方ならご存知の通り、序章終盤にイナズマイレブンのキャラから死人が出ています。また今後もある予定ですし、生き返り…なんて非常識展開もあったりします。

それでも大丈夫な方のみ、どうぞ。長い長い物語になりますがお付き合いただければ幸いです。

オリジナルキャラクター紹介

この作品にはオリジナルキャラクターが登場します。ただし、以下出張るのは二名のみ。またあくまでメインは版權キャラクターになります（個人的にオリキャラがたくさん出る＆メインに来る版權小説は苦手なため）。

桜美聖也

サクラムミサトヤ

雷門中三年の男子生徒。最近転校してきて、サッカー部に入部した。ポジションはMF。

青みがかった黒髪とキャップが特徴。群青色の瞳の中性的な容姿。黙ってれば相当な美形。が、とんでもない方向音痴。運動神経は良いのにドジ。さらに、可愛いコを男女問わずお持ち帰りしようとする問題児。雷門中の数少ないギャグ要員である。

体力馬鹿で怪力馬鹿だが、コントロール音痴すぎて試合ではあまり戦力にならない。そのせいかMFよりDFを任される事が多かったりする。必殺技は、彗星シュート&アポカリプス（オリジナルブロック技）。

FFで帝国地区予選の際、鉄骨の下敷きになりかけたにも関わらず足の骨折だけで済むほど丈夫。また、どこかの国の軍に関わる仕事をしていると噂であり、謎の多い人物である。

外見は中三だが、見た目通りの年齢ではない。天涯孤独となった吹雪の面倒を見ており、今でも仕送りは欠かしていない。

その正体は、S級犯罪者・災禍の魔女アルルネシアを追って、異世界からやって来た創造の魔女キーシクス。性別年齢外見を自在に変える事ができる為、普段は少年の姿をしている。が、性格と喋り

方は完全に素のまま。

二ノ宮蘭子

ニノミヤランコ

吉良星二郎直属の警護頭にして秘書官。エイリア石に関わる研究と実験を推し進める科学者達のリーダーでもある。

後ろでくくった茶髪のおかっぱが特徴。紅い眼をした、二十七歳くらいの妖艶な美女。ある日突然吉良の元に現れ側近になった為、エイリア学園メンバーからは多かれ少なかれ疑念を抱かれている。

冷酷で身勝手なサディストであり、ガゼルを始めとした多くの子供達に嫌われている。実は、全ての事件の鍵を握る存在である。

その正体は、自分の喜悦の為にあらゆる世界を混乱に陥れてきた災禍の魔女・アルルネシア。死者を自在に生き返らせ、駒として操ったり、人々の心の負の要素を増幅させ洗脳する事が出来る。

人間をゴミとしか思っておらず、良識などひとかけらも持ち合わせていない。聖也いわく、“最低最悪の愉快犯”。

考えちゃいけない事だと思う。

でも気付けば、考えちゃってるんだ。

俺とさえ出逢わなければ、俺さえいなければ。

風丸を不幸にしないで、済んだのになって。

『わあ…』

初めて出逢った日のこと、お前は覚えてるかなあ。

幼稚園の時だ。稲妻幼稚園は男女の服の違いが分かりにくいデザインだったから、俺最初、お前を女の子だと思ったんだ。

一番最初に目に入ったのは、すっごく綺麗な水色の髪。

『きれいーい…』

『え？』

さらさらと、まるで風が流れるみたいで。俺はつい触っちゃった。初対面なのにいきなり髪触られて、風丸つてば目をまんまるくしてたよな。

『きれいだなー。おれ、円堂守！キミ、ベッピンサンだーってよく言われない？すっごくきれいな、かみ！』

その言葉に、風丸はポカンとして…次の瞬間。

『おれは！男だあっ！！』

いきなり、パンチが飛んできた。そりやもう盛大に吹っ飛んださ。どうやら“別嬪”という言葉が基本的に女性に向けて使うものだと知っていたらしい（父ちゃんが使うのを聞いて真似してみたのだ）。

確かにあの時相手は親戚の女の子だった気がする)。

多分、風丸は幼い頃から、女の子みたいな自分の容姿を気にしてたんだろう。綺麗、と言われる事すら嫌だったのかもしれない。俺はもの見事に地雷を踏んじまったわけだ。

『これ以上よけいなこと言ってみろ！マジでぶつとばしてやる！！』

そして愛らしい見た目と裏腹に。大変男らしい、もっと言えばかなり喧嘩っばやい性格をしていた。白状する、俺はこの日風丸に数回パンチとキックをくらって思いきり泣かされたんだよな。

正直、風丸と喧嘩して勝った試しがない。小学生時代や幼稚園時代は俺の方がちょっとだけ大きかったのにな。めちやくちや喧嘩が強かった。きつとコンプレックスを克服したくて、やや間違った方向に男らしくしようとしてたんだと思う。

サッカーは、気がついたら当たり前のように傍にあった。

母ちゃんはじいちゃんの事があって、サッカーが嫌いだったから母ちゃんの目があるところで堂々とやる事はばかられたけど。俺と風丸は、クラスのみんなと一緒にいつつもサッカーやってたっけ。そうそう。あれは、小学一年生の時。

覚えるかなあ、冬っぺのこと。本名は冬花で…あー、名字は忘れちゃったけど。稲妻町にちよつとの間だけいたあの女の子だよ。突然転入してきて、また突然転校して行っちゃったんだだけ。

一年生の時は、よく三人でサッカーやったな。

きっかけは、冬っぺをいじめてたガキ大将達を俺が追っ払った事だっけ。最初は俺にさえなんか怯えてたあの子が、風丸には随分あつさり懐いたんだ。何でだと思っ？

『だって風丸くんってすごく綺麗で…男の子ってかんじがしないか

ら』

ははは、こりや参った。

風丸、結構へこんでたろ？さすがのお前も冬つぺに喧嘩は売れなかったみたいだしな。あつちに悪気があったわけでもないし。

この頃までの俺達は、多分平凡で平和で - - ありきたりな幸せに護られた世界に生きてたんだろ。そのままいけばもしかしたら、雷門サッカー部はフットボールフロンティアに出ないまま終わってたかもしれない。俺はこんなにサッカーに打ち込むことなく、普通に大きくなって、普通の大人になったかもしれない。

今ではもう、その全てが有り得ないと知っている。過去も未来も、いつの間にか全てが定められたものになっていたから。ああ、俺は否が応にも思い知らされた。

冬つぺが転校してから暫く後に起きた、あの事件。

ひよっとしたらアレ自体、アルルネシアが仕組んだ事だったんだろうか。

風丸が殺された。

俺は人殺しになった。

だけど起きた筈の悲劇は隠され、封印されてしまった。俺達の記憶も、周りの現実も、その先の未来も。全てが全て、魔女の手で改竄されたんだ。

死んだ筈の風丸と、俺が殺した通り魔の男は生き返させられた。生き返った通り魔を警察が捕まえるように仕向けたのも間違いなくアルルネシアだろう。風丸は襲われかけたけど助かった。シナリオはそう、書き換えられた。

でも、何もかもを忘れられたわけじゃない。記憶は消されても多分、俺達の心の何処かは惨劇を覚えていた。そして恐怖していたんだ。真実を思い出す事も、同じ事が繰り返すかもしれないという事も。

俺は、自分の罪を忘れて。

風丸は、自分が死者である事を知らずに。

俺達は運命に導かれるまま成長した。そして雷門中に入り、部活でサッカーを始める事になる。

風丸は俺の幼なじみで、だけどサッカーはやった事がない。きつとそういう“設定”にされていたのもあって、お前はその足を生かし陸上部に入ったんだろう。

よくよく思えば不思議なことはたくさんあったんだ。だってそうじゃん、サッカー殆どやった事ないのに、風丸ってば最初からサッカーが上手かった。初心者でいきなりリフティングを三十回続けてみせた時点で、やっぱり何かがおかしかった。だけどあの時の俺は風丸がサッカー部に入ってくれたのが嬉しくて、深く考える事もしなかったんだ。

きつと、何もかもが定められた“必然”だった。

俺が雷門中でサッカー部を率いたことも。

風丸がサッカーを始めた事も。

フットボールフロンティアにエイリア学園と、立て続けに闘いの渦中に放り出された事も。

そして - - “期限”が切れた時。風丸がもう一度何らかの形で命を落とす事になるのも。

何もかもが誰かの手の上で踊らされた、運命だったのかもしれない。

でもさ。

それでも俺、思っちゃうんだ。

たとえ俺達の過去が、俺達の手だけで切り開いてきたものでないとしても。全部が全部、俺達の意志で無かったとしても。

楽しかった。楽しかったんだよ、風丸。

お前と一緒にやるサッカー、すっげー楽しかったんだ。毎日毎日

みんなとボールを追いかけてさ、ゴールを目指して勝った負けたって……そんなシンプルな事が本当に楽しかったんだ。

だから否定したくないし、出来ない。そう思う事自体罪だとしても、俺はそこに風丸自身の想いが一つも無かったただなんて、思いたくないんだ。

最低だろ。

死者だとしても、お前がアルルネシアに生き返させられた事実さえ、肯定したくなってしまうなんて。

そもそも俺とさえ出逢わなければ、きっとお前は不幸になんかならなかった。死ぬ事も生き返る事も、魔女に弄ばれる事だって。

俺と出逢わなければ。

俺が“断罪の魔術師”の資格者でなければ。

俺とサッカーをやらなければ。

俺がサッカーをしてなければ。

そしてあの日、喧嘩なんかしなければ。

『なんだよ、悪いのは風丸じゃんか！風丸なんかだいつきらいだ！』

……ごめん。ごめんな、風丸。あんな酷いこと、言ってさ。

結局、謝っていない。思い出した時、君はもう世界にいない。

ごめんね、なんて遅すぎるけど。それでも言わせて欲しいんだ。

……大嫌いななんて、嘘だよ。本当は、大好きだったんだよ。

大好きな大好きな、最高の親友だったんだ。中学生になって、どんどん友達が増えて、最高の仲間がたくさんできてそれもそれは変わらなかった。

喧嘩つばやかった風丸は随分変わったよな。凄く目が優しくなっ

て、丸くなった。きっと本当の“強さ”ってヤツを真剣に考えてたんだと思う。だからまあ、考えすぎて悩んじゃう事も多かったんだよな。

今思うと、謝らなきゃいけない事だらけだった。この一連の戦いにしたってそう。お前の生真面目な性格を思えば、どれだけ精神的に追い詰められてたかなんて、簡単に分かりそうなものなのに。

『なあ…教えてくれよ円堂。俺達はいつまで頑張ればいいんだ？』

頑張っても頑張っても報われない。先が見えない。焦るばかりで、思うように動かない身体を引きずって、這いずるような日々。そうだよな。サッカーは楽しいもので…誰かに強制されて無理矢理頑張るようなものじゃなかったのに。

『みんながみんな！お前みたいに強いと思うな！！そもそも俺は…俺達は世界を救う為にサッカーを始めたわけじゃない！！そんな大それた目的、背負いきれるわけないのにな…』

俺が、風丸にもみんなにも強制させた。ルールを守った正々堂々としたサッカーを“やらなくちゃいけない”。

特訓して特訓して、もつともつと強く“ならなくちゃいけない”。勿論、そんなつもりなんか無かった。でもきつと俺は、俺自身が思っていた以上に余裕が無かったんだと思う。

俺、このチームのキャプテンなのにさ。自分の事だけで精一杯になって、周りの事がちつとも見えてなかった。風丸はあんなにはつきり、SOSを出してくれてたのにな。

ただ、楽しいサッカーで上を目指す為に。フットボールフロンティアで優勝する為に、風丸はサッカーをもう一度始めてくれた。俺の為に助っ人になってくれて、最終的に正式な部員になってくれた。

そつだ。風丸の言う通り。

世界を救う為に、こんな辛い闘いを強いられるだなんて、誰が予想してただろう。俺達、ただの中学生のサッカー部員だった筈だぞ？

おまけに――やっとの思いで優勝したフットボールフロンティア制覇のその日に。積み上げた全てを否定されるような負け方するなんて、考えてもみなかった事だ。そこで心が折れても仕方なかったのに、風丸は俺に着いてきてくれたよな。

「…風丸」

呟きは、泣き出しそんな曇空へ溶けていく。

「俺だつて、強くなんかないよ。強くなれるって、思い込もうとしてただけなんだよ…」

強いのは風丸、お前の方じゃないか。

たくさん、たくさん悲しい事が起きた。プライドをズタズタにされたあげく、仲間達が次々いなくなっていく。豪炎寺は行方不明。鬼道は殺された。佐久間や源田の魂は汚され、染岡は離脱して。イプシロンもジェネシスも、みんなみんな悲鳴を上げていて。

そんな中で俺はいつも無力。ゴールだけじゃない、みんなを護れる本当の守護神になろうって決めたのに――何一つ止められやしなかった。

なのにお前は、自力で立ち上がってみせたんだ。それが本当の強さだ。今の風丸は俺の何万倍も強い、うん、間違いない。

だから、さ。

お礼も謝罪も足りなすぎるんだよ。俺はまだたくさん、お前に伝えたい事があるんだ。なあ、聴いてくれよ。

あの日言えなかった“ごめんなさい”。あの日の続きの、仲直りをしよう。今度はちゃんと声に出して本当の気持ちを言うから。許

せないなら、それでもいいから。

『サッカーやろうぜ、円堂』

お願い。どうか帰ってきて。

そしてまた、笑って。どんな風丸だって、俺の最高の親友な事に
違いはないんだから。

どうか、終わらせて下さい。

全ての悲しい事を。

誰か、嘘だと言って下さい。

全ては悪い夢だと。目を覚ました時夜は明けていて、朝日が輝い
ているから大丈夫だと・・・ねえ、どうか。

【4 - 1・誰かの為に、明日の為に】

佐久間は焦っていた。いや、焦りというより――歯痒くて仕方ない、と言った方が正しいかもしれない。

福岡で起きた出来事の全ては、渡されたノートパソコンのリアルタイム中継で知っていた。ジェネシスと雷門のあまりに悲しい試合も、そこで新たに犠牲者を出す事になった顛末も。

「くそっ…！」

車椅子を使い、動かない身体を無理矢理動かして進む。病院の廊下は静まり返っている。偶然なのか理由があるのか、今は廊下に出ている患者や看護師の数が極端に少なかった。

そして僅かにすれ違った患者達は、佐久間をちらりと見て（精々、車椅子がなんとなく邪魔だという程度の興味のない目線だった）通り過ぎていく。尤も、今の佐久間にはどうでも良い事ではあったが、円堂にしろ風丸にしろ、特に親しい間柄というわけではない。むしろ一時は恨みさえしていた。彼らさえいなければ、鬼道が帝国を離れる事は無かったのだから。

でも。彼らが、絶望の淵にいた自分達を救ってくれた事もまた事実である。彼らがいなければ、きっと自分も源田も闇の底から抜け出せずにいただろう。

――悔しいんだ…このままじゃ。

自分が本当に助かって良かったのか。生きていてもいいのか。実のところはまだ分からない。だが現実には死を免れて此処にいるのであれば、何かやるべき事はある筈なのだ。

――ただ悲劇を見てるだけなんて、絶対嫌だ！

必死になって車椅子を操作する。車輪を回す手が震えて、そのたびに痛みが走るが構わなかった。

「あ……」

角を曲がったところで、人にぶつかりそうになる。

「源田……」

源田だった。ふらふらと、壁に手をつきながら歩いている。彼には大した怪我をしていなかった為、歩けるようになるまでが早かったのだ。無論、長い距離には支障が出るが。

「なんだ、佐久間もか。考える事は同じだな」

顔色は悪いながらも、気丈に笑う源田。

「あの魔女を、探してるんだろっ？」

肯く佐久間。思い出すのは、自分達が奇跡的に意識を取り戻し、生きる覚悟を決めたあの日のこと。

お見舞いに来てくれた辺見達が帰った後だ。その女性は現れた。音もなく気配もなく、まるで空気から滲み出たかのように唐突に。

長い銀髪は、まるで角のように固められている。ややキツイ印象を与えるものの、それはメイクのせいだと分かった。綺麗な赤い眼の奥、冷たさの向こうに確かな温かさが見えた。

長身の、とてもとても美しい女性。思わず見惚れずにはいられないほどの。

だけど。それでも警戒せずには居られなかったのは、彼女がアルルネシアを連想させる真っ赤なドレスを身に纏っていたこと。そのあまりに超常的な登場の仕方が、その正体を容易く予測させたからだ。

『ま…魔女…！？』

アルルネシアや聖也「キークスと同じ、異世界を渡り魔を操る女。正直、お世辞にも良いイメージは無かった。警戒するのが当然だろう。

ましてや、こちらはベッドから起き上がる事もままならない重傷患者。無防備に等しい。強大な魔女に対する有効な防衛手段などある筈もない。

『佐久間次郎に、源田幸次郎…ですね』

警戒心を露わにする佐久間達に、女が口を開く。思いの外物腰の柔らかい声と喋り方だった。

『初めまして。私は、時間の魔女アルティミシアと申します』

『アルティ、ミシア？』

『かつての弟子が、大変な事をしてしまいましたね』

アルティミシア。アルルネシアとよく似た名前。それは、彼女がアルルネシアの師である事に関係しているのだろうか。

だがそんな些細な疑問は、次の瞬間には吹っ飛んでいた。目の前の魔女が、深々と頭を下げてきたからだ。

『申し訳ありませんでした…！』

驚いた、どころではなく。ぎょっとさせられた。

まさか魔女に謝罪を受ける日が来るなんて思ってもみなかったか

『謝って赦される事でもなければ、私が謝って償いになるとも思いません。でも私が、私をもっと早く彼女を止めていれば、こんな事にはならなかった…!!』

泣きそうな声だった。佐久間は慌てて彼女を宥めてしまった。事情があまりに飲み込めないのもあるし、女性に泣かれるのは男として辛いもある。

何より。あくまで事をしでかしたのはアルルネシアだ。鬼道を殺したのも佐久間と源田を洗脳したのも、影山や不動を唆したのも全部。犯人でもない人間に謝られたって、正直困る。

ややバタバタしながらも、アルティミシアから大まかな事情は聞き出した。アルルネシアはかつてアルティミシアに憧れ、押し掛け弟子のようについて回っていたこと。ある時思想の違いから決別し、袂を分かったこと。

そして。その後からアルルネシアの暴走が始まり、次々あらゆる世界に災厄を撒き散らし始めたことも。

『私もまたいろいろ前科のある身ゆえ…今はその償いを兼ねて、聖也の元である事をしています』

『聖也って…雷門の桜美聖也?』

『ええ』

どうやらこの女性は、聖也の仲間であるらしい。アルルネシアの謝罪をしてきた事からしても、とりあえずは敵でない事は分かる。

『様々な異世界の監視と治安維持。…主にアルルネシアのような、犯罪者を取り締まるのを仕事にしているのです。異世界を渡る魔女を捕らえられるのは、同じ力を持つ者だけですから』

その上で、貴方達にお願いがあって来ました、と。アルティミシ

アは静かに告げたのだった。

『私達と共に…アルルネシアを倒して欲しいのです』

そう。

アルティミシアは。アルルネシアを倒す為に、佐久間と源田に協力を要請してきたのだ。自分と契約を交わし、魔女に抗する為の力をつけて欲しい、と。

最初はとても信じられなかった。自分も源田も、どうにか意識を取り戻したとはいえベッドから起き上がれもしない重傷者。そうではなくとも魔女相手に何の特別な力も持たない、一般人に他ならない役に立てるとは、到底思えなかった。

そもそも、自分達はあまりに大きな罪を犯して此処にいる。何もかも自分の意志で無いとはいえ、一時はアルルネシアの計画に手を貸したと言っても過言ではない。そんな自分達をどうして信用できるのか。

混乱する佐久間に、アルティミシアは言った。

『魔法とは…願いの力なのですよ。素質ある者が強く願いさえすれば、それ以上の脅威は無いわ』

佐久間は目を見開く。

魔法の素質がある？自分と源田に？

『貴方達は強く願っている。本当の強さを得たいと…護る為の力が欲しいと。そして亡き人の意志に報いる方法を捜している…違いますか？』

違わない。

本心を言い当てられ、黙るしかない。

「まだまだ、悲劇は続くでしょう。この先に待つ絶望がどんなモノかなんて想像もつかないこと。その上魔女との契約の代償は軽くない」

その上で私は此処に来たのです、とアルティミシアは告げる。

『前に進む覚悟がおりなら。私と、私達と契約を』

佐久間は僅かに逡巡した。魔女の力の恐ろしさは身に沁みている。安易にその域に手を出すべきでない事も分かっている。

だが。否、だからこそ。

これこそが、自分が生かされた意味ではないか――架せられた役目ではないかと。そうも、思ったのだ。

佐久間と源田は、共に差し出された手を取った。魔女に対抗出来る存在に――魔術師の力を得る為に。

「魔法つて、凄いな」

手を握ったり開いたり。その感触を確かめながら、佐久間は言う。

「致命傷だったし、普通なら助かってもし生寝たきりになるような怪我だったんだぜ？それがこんなスピードで回復するなんて」

アルティミシアと交わした契約は以下の通り。

まず佐久間と源田に必要なのは、悲惨極まりないこの怪我を一刻も早く治す事だ。ゆえに、アルティミシアの力で二人の“時間”を早め、驚異的な早さで回復するよう魔法をかけて貰ったのである。

ただし、この魔法を受けるにあたり幾つかの対価を支払う事になった。

一つ。怪我が完治しない限り、二人は与えられた魔法を自らの力では使えない。

二つ。時間を早める為に、佐久間と源田の本来の寿命が削られる。また、どれくらい削られたかも知る事が出来ない。

三つ。魔法が使えるようになった後は、アルティミシアや聖也が所属する組織 - ラストエデンに従って仕事をこなすこと。

これでもかなり軽い対価であるらしかった。というのも佐久間と源田を魔女と契約させるのは、アルティミシアや聖也の願いでもあったからだ。彼女たちもまた、この契約の為の代償を負っているのだという。

「有り得ない事は有り得ない…んだよ佐久間」

源田がやや苦い笑みを浮かべる。

「堅苦しく考えても混乱するだけさ。魔法なんかなくて、当たり前のように否定出来てた頃にはもう戻れないんだから」

「…まあな」

今だからこそ分かる。かつての自分達が、どれだけ幸せな場所にいたのかが。

総帥の鳥籠に囚われた世界だった。その為に毎日毎日傷ついていくばかりの人がいて、その人に護られるしか出来ない自分があまりに齒痒くて。

一步踏み出せば崩れ去るような、脆い地盤の上に成り立っていたかもしれない。そこには鬼道だけでなくたくさんの見えない屍が転がっていたかもしれない。だけど。

帝国で。自分達は確かに笑い合っていた。鬼道もまた、笑っていた。一人じゃないと、共に支え合える仲間がいると知っていて。それは紛れもなく“幸せ”と呼ばれた日々だった。

平凡な平穩。静かな平和が続いて生きて死ぬと、誰もが無意識に、当たり前のように信じていたあの頃。まさかこんな悲劇的な未来や、

魔女のファンタジーバトルに巻き込まれるだなんて誰が予想しただろう？

もう二度と。あんな毎日には戻れない。失ってしまったものがあって、知ってしまった現実がある以上は。

「…時間を負うしかないのは分かってるんだ、でも…何もしないでいるなんて、嫌だ」

佐久間は呻く。

大切な友達がエイリア学園の人間で。しかも酷く傷ついて追い詰められているのを目の当たりにして。

さらにはずっと共に戦ってきた親友の…風丸の、死。円堂の心中は察するに余りあるものだった。

今の彼らに立ち上がれなんて言えない。言わずとも立ち上がれてしまふのもまた彼らであり、故に見ていたたまれないのもまた事実なのだ。

「何か、出来る事が欲しい…どんなに無力だとしても」

「……ああ」

その時だった。階下から、バタバタと駆け上がってくる足音を聞きつけたのは。

「え？」

明らかに焦った様子で階段を昇ってきたのは、佐久間が今まさに捜していた人物だった。

アルティミシアは佐久間と源田の姿を捉えると、驚きを露わにして…言った。

「駄目…ッ…逃げなさい！早く！！」

状況が飲み込めずフリーズする佐久間。逃げる？何から？何処へ？戸惑っている間に状況は変化していく。現れたのは、影だった。真っ黒な影が、突如足元から吹き出して来たのだ。

【4 - 2・祝祭の魔女、降臨】

それは、ウネウネと地面を這い、床を舐めるようにして動き回る。時に絡み合い、時に溶け合う、まるで液体のような黒。

「何だこれは…!?!」

源田は呆然とその光景を眺めていた。無意識に、車椅子でろくに動けない状態の佐久間の傍に寄る。

本能以理解していた。この“影”は…とても良くないモノ。本来この世界にあつてはならないモノだと。

自分以上に佐久間は重傷なのだ。自分に何が出来るか分からないにせよ、彼だけは庇わなければ…その心理だけが働いていた。本能的な恐怖に抗うように。

「ハートレス、です」

「ハートレス?」

「ええ」

床を這う影達を見ながら、アルティミシアが言う。その顔は若干青ざめているように見える。

「簡単に言えば、人の心を食らう魔物。心なきもの…ハートレスと呼ばれています。襲われた者は死ぬか、廃人になるか、同じ化け物になるか…」

「なっ…!?!」

そんなにヤバいものなのか。一気に顔から血の気が引く。

「…この世界に…出現した前例はありませんでした。しかし、アルルネシアの撒き散らした災厄の影響で、あちこちに歪みが出ているのでしょうか。これもその、一つ」

彼女が説明している間に、影はゆつくりと床から盛り上がり始めた。ぐねぐね、ぐねぐねとした動きが気色悪い。

しかしその薄気味悪さに反し、やがて成されたその形は愛らしささえあるものだった。丸っこいフォルム。小さな手足に大きな頭。二本の触覚に、金色の丸い瞳。

「シャドウ、と呼ばれる種です。ハートレスの中では最弱の部類に入りますが、襲われた者の末路に変わりはありません」

不意に、シャドウが飛びかかってきた。鋭い爪を振りかざして、真っ直ぐ源田目掛けて。

「くっ！！」

避けたというより、転んだと言った方が正しい。だがそのおかげで、影の餌食になる事は免れた。

ザシュツ、と音がする。ぞっとした。壁が抉れ、大きな爪痕が出来ていたからだ。

ハートレスはみるみる数を増やしている。わらわらと集まってくるそれらに、赤い矢のようなものが次々と突き刺さった。まるで蒸発するかのように消えるシャドウ。

「…何が理由で今、この場所にこんな大量のハートレスが出現したか分かりませんが…非常に危険です！お二人は早く非難して下さい！！」

どうやらアルティミシアの魔法らしい。彼女の回りに浮かび上がった幾つもの小さな赤い矢が、次々とシャドウ達を一撃の元抹殺していく。しかし、数が多すぎる。これではキリがない。

「避難つて…そんな事言われても…!!」

こつもわらわらと集まってこられては、動くに動けない。佐久間は勿論、源田自身も走れるような状態にないのだから尚更だ。

「く、来るな！」

「佐久間!!」

そうこうしている間に、シャドウの数体が佐久間の車椅子にまわりつき始めた。マズい。アルティミシアが矢で射るも追いつかない。

このままでは…!!

「光よ!!」

凜とした声と共に。真白い光が弾け、一瞬周囲を覆い尽くした。あまりの眩しさに、目を閉じる源田。そして。

「なっ…!!?」

眼を開いて、仰天する。当然だ。さっきまで廊下を埋め尽くさんばかりにハートレス達がひしめき合っていたというのに…それら全てが、影も形もなく消滅していたのだから。

「なんとか…間に合った…!!」

「…！お前は…！！」

肩で息をしながらも、走ってきた少年。緑色のポニーテール。少女のような顔立ち。そして、雷門のユニフォーム。

「レーゼ…」

どうして彼が此処に。大阪のイプシロンとの戦いで倒れて、聖也の所有する救護施設にかつぎ込まれたと聞いていたが。

「聖也との契約…どうやら、不完全ながら覚醒したようですね」

困惑する源田と佐久間をよそに、アルティミシアは全て分かっているらしかった。レーゼに向けて笑みを浮かべる。

「緑川リュウジ…祝祭の魔女、レーゼ」

魔女？彼が？

源田はつい、まじまじとレーゼを観察してしまう。特徴的なポニーテールや服装に変わりはない。しかし、その両手には不思議な…鍵の形をした双剣が握られている。

「いつまでも寝てられないからな。…本番は、これからなんだ」

レーゼが腕を振ると、剣は光の粒子になって消えてしまった。あの剣は一体何なのだろう。妙に気になった。

「佐久間に源田。円堂達の為に…何か出来る事をしたかと思っていは、私も同じだ」

半ば混乱している自分達に、レーゼは話しかけてくる。

「だが、アルティミシアにも説明されただろうが…これ以上お前達の時間を進めるわけにはいかない。どうか…私達に任せてくれないか」

「レーゼ…」

「頼む」

突然レーゼに頭を下げられ、驚く源田。今度は謝罪ではなく、懇願の為だと分かっていたが。

「私も…福岡の試合を、見ている事しか出来なかった」

その言葉にはつとずる。

悲劇を見ているしか出来なかった辛さ。何かしなければという焦り。そういった意味で、自分達は同じだということに。

「連絡は受けている。円堂は今…目も当てられないような状態だ。そつだ。あれからろくに食事もしていないらしくて」

「…!!!」

あの円堂が。源田は佐久間と顔を見合わせる。予想の範疇とはいえ、具体的には想像し難いものがあるのだ。

自分達の知る円堂は。いつもゴールを背にどっしり構えて守り、仲間達が挫けそうな時も気丈に励ましてみせる…そんな男だったから。

「私になら何がどう出来る…なんて自惚れるつもりはないけど。少しは魔法に触れた私だから、出来る事もあるかもしれないって思う」

頼むよ、と。再三言われれば頷くしかなかった。どのみち自分達が今すぐ動けない事には変わりはないのだから、誰かに託すしかない。

それに。さつき見せたレーゼの力には驚かされた。あれが魔法、なのだろうか。あれだけの力があるなら…-と思ったのもまた事実だ。

「そつだ、アルティミシア…」

契約について話があるんだが、と。続けようとした源田の言葉は、中途半端に途切れた。

「…源田？」

何かを察したのだろう、佐久間が訝しげに見上げてくる。しかし、今の源田に返事をする余裕など無かった。

「痛っ…うぐっ…！」

「源田!？」

膝を追って、前のめりに倒れる。

お腹が、痛い。

内臓をぐちゃぐちゃとかき回されているかのよう。悲鳴すら声にならないほどの激痛が下肢から突き上げる。吐き気も酷い。口元と腹を押さえて、うずくまる。

何だ。一体何が起きたのだ。

頭まで割れるように痛み出した。意識が急速に遠ざかっていく。幾つもの声が、脳内で反響する。

『逆らうな…私に逆らうな逆らうな逆らうな!…!』

『貴方達は魔女や魔術師の素質は無いみたいだけど…蛹としてなら、どうかしらっ?』

『痛い…痛い、痛い…やめて、下々…!』

『きゃは八はは八八あはア』

どくん、と大きな鼓動。
参ったな、と思う。心臓まで痛くなってきた。

『逢えるまで、もう少し』

誰？逢えるって、何？

「源田！！しつかりしろ！！」

佐久間の声を最後に。源田の意識は、プツツリと途切れたのだった。

「源田が倒れたただあ！？」

聖也は思わず大きな声を出してしまい、慌てて周囲を見回した。
陽花戸中の校舎裏。幸い、人気はない。

「…どういう事だよ。確かにあいつらは万全な体調にや程遠いだろ
うが…。お前の力で、出歩けるくらいは回復させたんだろ？」

『ええ』

携帯の向こう。アルティミシアの声は堅い。

『彼が意識を失ってすぐ、医師を呼んで調べて貰いました。が…原因がまったく分からないそうなんです。痛みはだいぶ引いたとはいえ、まだかなり辛そうですし…熱も出ているのに』

吐き気。腹痛に胸痛に頭痛。さらには発熱。

聖也の頬を冷や汗が伝った。嫌な想像しかできない。なんせその症状は…。

「アルルネシアにやられた…ってか？」

可能性は恐ろしく高い。そもそも、佐久間と源田はアルルネシアに生き返させられた存在。その課程で、どのように身体をいじくり回されていてもおかしくないのだ。

デザムやレーゼがそうだったように。

「…佐久間の方は何ともないんだな？」

『ええ。しかしあくまで“現時点では”の話。今後どうなるかは分かりませんね』

「だろうな」

もし、アルルネシアが佐久間と源田に魔法的な処置を施していたなら。一般的な人間の医学ではどうにもなるまい。CTスキャンにかけてもレントゲンを撮っても何も映りはしない。

そう、彼らがそのまま変死したとしても。

「…もう一度、二人をラストエデンのホームに連れて行ってくれ。手配はしておく」

実は彼らが一命を取り留めた直後、一度ラストエデン所属の医師

にも見せている。魔力を感知できるスキャンや検査も行ったが、その時は何も異常が見あたらなかったので安心していた。

が。もし遅効性の爆発物や毒薬やそれに値するものが仕込まれていたなら。最初は見つからなくても今もう一度検査したら結果は違ってくるかもしれない。

「分かりました。…それで、キーシクス。そちらの状況はどうなっていますか？」

「んー…多分、ミシアが察してる通りよ？」

聖也は苦い笑みを浮かべる。無論、電話ごしのアルティミシアに見える筈もないけれど。

「みんな、精神的にズタズタだぜ。吹雪や宮坂も酷いが…円堂がダントツで悲惨。このままじゃ餓死するか衰弱死するか、だな」

風丸やヒロトの件だけではない。あの後、栗末まで離脱したのがトドメだった。状況を考えれば誰も栗末を責めることなどできないが…円堂が受けたショックの大きさを思うといたたまれない。元より、キャプテンとしての重圧から、誰にも言えないストレスを抱え続けていたに違いないのだ。それが今回の件をきっかけに一気に決壊してしまったのだろう。

「でも…きつとこれは、必要なこと」

どんなに痛くても、辛くても、壁にぶつからなければならぬ。

本当の意味で誰もが絶望を知り、思い知るべきだったと知っている。乗り越えて、大切なものを守る為に。

「…先程、レーゼに一時復帰許可を出しました。もう少し慣らす必要はありますが、とりあえず大丈夫な筈です」

少しの沈黙の後、口を開くアルティミシア。

『彼は…風丸に懐いていましたから。本当は辛くて仕方なかった筈です。それでも…自力で、立ち上がってみせた』

そうだな、と聖也は小さく呟く。レーゼの様子はちよくちよく聞いていたから知っている。

あの子は本当に、強い。だからきつと彼なら、今の雷門を救える。彼にしか出来ないことが出来る筈だ。

「…俺も、しゃきつとしねーとな…」

一つ、溜め息をついて電話を切った。自分は今もう、泣くわけにはいかない。これ以上卑い涙を流さぬ為、やるべきことをするだけだ。

空はまだ、暗いまま。光の射す気配はない。さながら自分達の心模様を示すかのよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5866y/>

この背中に、白い翼は無いとしても。 5 《第四章～どうか壊さないで、貴方の

2011年11月26日00時57分発行